



©Shin Yamagishi

第218回定期演奏会 シヨスタコーヴィチの苦悩と希望

2026年6月20日(土) 13:45開場 14:30開演
指揮/藤岡幸夫 ヴァイオリン/ラヴィリ・イスリャモフ*
シヨスタコーヴィチ プログラム
・ヴァイオリン協奏曲第1番イ短調Op.77*
・交響曲第5番ニ短調Op.47

本日の定期演奏会からは〈ゴートゥ・ザ・セントラル〉をテーマとした新シーズンのスタートです。楽団の名前にも冠されている〈セントラル (=中心の、主要な)〉といった意味もかけて、〈それぞれの作曲家の中心となるような作品〉へ焦点を当てていこう……といった意図が込められています。

さらに〈ゴー〉にかけて、番号に〈5〉のつく作品を取り上げる回数も数々あります。面白いことに、交響曲にせよ協奏曲にせよ、第5番ともなると、作曲家も円熟の極に達しているものですから、確かに傑作が多いのです。——次回の定期(6月20日)で、さっそく〈5〉の練達を実感していただきましょう。西へ東へ日々大活躍のマエストロ藤岡幸夫が登場して、シヨスタコーヴィチの人気作・交響曲第5番に、情熱の傑作・ヴァイオリン協奏曲第1番を指揮します。

マエストロ藤岡は、もう30年近くも深い絆で結ばれている関西フィルハーモニー管弦楽団を総監督・首席指揮者としてリード、コンビの演奏は彼が司会を務めるBSテレビ東京『エンター・ザ・ミュージック』で毎週放送されているのでお馴染みでしょう。東京シティ・フィルハーモニック管弦楽団の首席客演指揮者(2019年〜)としてもたびたび熱演を披露。さらに今年4月からは、中部フィルハーモニー交響楽団の芸術顧問(アーティストック・アドバイザー)に就任し、中京圏のクラシック音楽界をさらなる高みへ推し上げてゆく活動にもいよいよ力が入ります。

そんなタイミングでのセントラル愛知響への客演指揮、マエストロ藤岡の明快にして豪快なタクトが切り拓いてゆくシヨスタコーヴィチの〈焰〉、音楽の内なる深みからめらめらと燃え上がる凄まじいエネルギーを、ぜひ体感していただきたいと思います。

◆シヨスタコーヴィチ、〈闘争から勝利へ〉を響かせる代表作・交響曲第5番

作曲家ドミトリ・ドミトリエヴィッチ・シヨスタコーヴィチ(1906~1975)がその頭角を現したのは、レニングラード音楽院の卒業作品として書かれた、交響曲第1番(1925年)でした。いま聴いても新鮮な、創意の輝くこの作品は凄まじい大喝采で迎えられ、シヨスタコーヴィチは一躍スターとなりました。

帝政ロシアが崩壊して、ソビエト連邦が成立したのが1922(大正11)年。ロシア革命の荒波を間近に感じながら出発したシヨスタコーヴィチは、新生ソ連を代表する作曲家として活躍してゆくことになりますが……同時に、ソ連に荒れ狂いつづけた政治的な荒波に大きく揉まれ続けることにもなります。

恐怖で国を支配したスターリン体制下、たび重なる激しい粛正の嵐がシヨスタコーヴィチの身近にも迫ります。たびたび凄まじい批判を受け、正に生命の危機に直面しながらも、彼はそのたびに新しい作品で「回答」を出してすれすれで切り抜けていきました。そのひとつが、次回定期で演奏される交響曲第5番(1937年)です。

その前年——1936年のはじめ、シヨスタコーヴィチのオペラ《ムツェンスク郡のマクベス夫人》がソ連共産党機関誌『プラウダ』紙上で徹底的な批判を受ける、という事件がおきました。スターリンによる芸術への露骨な統制でしたが、これを受けてソ連芸術界は大混乱。かつてこのオペラを賞賛した者たちが、さびすを返したように批判に回り、シヨスタコーヴィチの作品は演奏禁止状態となってしまいます。

シヨスタコーヴィチの周りにも粛正される者が増えてゆきます。これは芸術的危機だけではなく、生命の危険でした。〈名誉回復〉を必要としたシヨスタコーヴィチは、1937年4月から僅か3ヶ月で新作(交響曲第5番)を作曲したのです。

1937年11月、若きムラヴィンスキーの指揮するレニングラード・フィルによっておこなわれた世界初演は、大成功を収めました。苦闘をしめすような第1楽章から、第4楽章の歓喜のコーダへ至る〈闘争から勝利へ〉……その精神的道程を描いた、と解釈されたこの第5番は、逆に危険なくらいの大喝采を浴びたといえます(シヨスタコーヴィチへの賞賛が、共産党への批判的示威と解釈されかねないほどの熱狂的反応だったそうです)。彼を批判してきた批評家・作曲家たちからも絶賛され、シヨスタコーヴィチは復権しました。

◆しかし、その裏側には……二重言語で隠されたものとは

ソ連国内はもちろん、西側諸国においても〈社会主義リアリズム〉の偉大な達成として大いに宣伝され、人生の闘争と勝利を明るく肯定する傑作として演奏され続けたのですが……後年、この作品にもショスタコーヴィチの〈二重言語〉が秘められている、ということが明らかになるにつれて、解釈は大きく割れることになりました。これはストレートに勝利を歌いあげる歓喜の終結へ至るのではなく、そこに全く逆の含意があるのではないか、という説が浮上してきたのです。

たとえば、批判を受けたのちに作曲した歌曲《プーシキンの詩による4つのロマンス》から《復活》が第4楽章で引用されているのですが、その歌詞の内容が非常に皮肉なものであること、あるいは静謐な哀歌に充たされた第3楽章にもマラーヤロシア正教のレクイエムを暗示するものがあることなど、千葉潤『作曲家◎人と作品 ショスタコーヴィチ』[2005年／音楽之友社刊]に詳しいのでぜひご参照ください(作曲家の生涯を丹念に追ったローレル・E・ファーイの大著『ショスタコーヴィチ ある生涯』[藤岡啓介、佐々木千恵訳／改訂新版2005年／アルファベータ]も併せ読まれますよう)。

かつては《革命》という愛称つきで呼ばれさせたこの交響曲(まったく根拠がないので、いまでは使われない愛称です)、その随所に隠された〈二重言語〉は、今も多くの論議を呼んでいます。しかし、そこに仮面があろうとも、少なくともこの交響曲が〈闘争から勝利へ〉の明瞭な表現として広く受け止められ続けてきたこと、それは歴史的な事実です。そして、そこにどのような含意があろうとも、この第5交響曲には、皮肉も抗議も深く溶かして軽々と隠蔽させるほどのエネルギーが充満しています。演奏から、浴びてみてください。

◆ヴァイオリン協奏曲第1番、重厚にして疾走感も溢れる奇蹟の傑作!

次回定期で前半に演奏されるのは、ショスタコーヴィチのヴァイオリン協奏曲第1番 イ短調(1947~48年)です。これがまた実に手応えの深い傑作で、単に華やかなコンチェルトではなく、交響曲的な深みを持ちながらソリストの音楽性をたっぷりと味わえるという、重厚な音楽なのです。

第1楽章は〈ノクターン(夜想曲)〉と題された中にも鋭い詩情が溢れ、ちょっと不安な美しさを刻むメロディや瞑想的な響きが、内面的な深みを広げてゆきます。第2楽章〈スケルツォ〉には、ショスタコーヴィチが得意とする皮肉と諧謔がこれでもかと満ちて、裏読みせずとも仮面がにやりと笑うのが見えるような凄まじさ。第3楽章は古くからの変奏形式である〈パッサカリヤ〉でいよいよシンフォニックに……しかしその末尾には、ほとんど独立楽章のような迫力を持つカデンツァ(ソロ奏者の独奏が存分に音楽性を発揮する箇所)が。そして第4楽章〈ブルレスケ〉の、目も耳も奪われるような諧謔と充実の疾走へ!

これぞショスタコーヴィチ、という個性が彫りも深く響き歌われる傑作ですが、本作にもまた時代背景との絡みがあればこれあるあたりは、当日の楽曲解説などにお譲りにすることに致しましょう。

ヴァイオリン独奏にお迎えするのは、チャイコフスキー・コンクール第2位、本選での演奏も大喝采を受けて輝かしい出発を遂げた俊オラヴィリ・イスリヤモフさん。ショスタコーヴィチの人気作を斬れ味も鮮やかに魅せてくれることを楽しみに、次回もこのホールでショスタコーヴィチの音世界をご一緒に体感いたしましょう!

やまの たけひろ
山野雄大

ライター [音楽・舞踊評論]。『レコード芸術 ONLINE』『バンドジャーナル』『音楽の友』など雑誌・新聞への寄稿をはじめ、NHK・FM「オペラ・ファンタスティカ」他ラジオ出演も。第一生命ホールでのコンサートシリーズ《雄大と行く 昼の音楽さんぽ》ナビゲーターほか、CDや公演の解説、朝日カルチャーセンターでの音楽講座、歌詞対訳など多数。レイディエート・フィル正指揮者ほかアマチュア・オーケストラの指揮も。

Profile

